学部・講義：幼児や保育者の姿、保育の現場を想い描きながら幼児教育の基本的な理論と方法を学ぶ

幼児教育・青井倫子

１．　授業の概要

本科目は幼年教育の専修科目であると同時に、幼稚園教諭（一種、二種）免許状の教職に関する必修科目である。

この授業では､幼稚園教育要領における｢環境を通しての教育｣｢遊びを通しての指導｣について理解すること、幼児期の発達の特性について理解し、幼児期の発達にふさわしい保育のあり方について考え、実践できる力を育成することをめざす。第１回から第１０回までを学部教員（青井、深田）が、第１１回から第１５回までを附属幼稚園の教員が担当することにより、理論と実践の統合的理解をめざしている。本報告は、青井が担当した第１回から第５回までの講義についての学生アンケート結果をもとにしている。

２．　受講学生　32 名

3 回生:31 名（ 教育学 3 名､幼年教育 7 名、音楽教育3名､保健体育1名、技術教育1名､家政教育2名、障害児教育 14 名）

4 回生:1 名（障害児教育 1 名）

３．　授業の工夫

(1)幼年教育専修以外の受講生が多く､幼児教育の基礎知識や、幼児とかかわった経験、幼稚園を見学した経験などがまったくない学生も多数いる。そのような学生であっても、具体的な幼児の姿や保育場面をイメージしながら授業を理解できるような配慮を常に心がけた（ビデオ視聴、幼稚園教諭と園児のやりとりを青井の演技力の範囲内で再現、青井が研究上記録した事例をプリントで配付、等)。

(2) ノートテイクに労を費やさず、授業内容を理解することに集中できるよう、授業は記入式のプリントに従ってすすめた。

(3) 学生が自らの意見や考えを持ち、それと照らし合わせながら理解を深めていけるよう（一方的な伝達にならないよう)、発問-応答のやりとりを心がけた。

(4) 青井が幼児を演じ、学生に幼稚園教諭として応対させ、それに対してコメントや解説を与える方法も取り入れた。

４．　授業評価の方法

第５回目授業終了時にアンケート（５段階評定と自由記述）を配付し、記入してもらった。学年・専修・氏名の記入は、個々の学生の自由意思に任せた。

５．　授業評価の結果

５：たいへんそう思う（非常によい）
４：ややそう思う（よい）
３：どちらともいえない（ふつう）
２：あまりそう思わない（あまりよくない）
１：まったくそう思わない（よくない）

(1)学生の自己評価

出席状況	4.8
受講前に問題意識があったか	3.4
意欲的に取り組んだか	4.3

(2)授業に対する評価

テーマ・目的は明確だったか	4.6
話し方は明確・聞き取りやすかったか	4.7
重要なことを強調したか	4.6
プリントに沿った授業は理解を助けたか	4.7
指定教科書は学習に有効だったか	4.7
授業への熱意・工夫が感じられたか	4.8
内容・レベルは適切だったか	4.0
考えが培われたり得るものがあったか	4.7
学問をする雰囲気は保たれていたか	4.7
教職に就くうえで有益だったか	4.6

(3)自由記述

【幼児教育の基本に関して】

・「環境を通しての教育」には目に見えないものもあるので、今回の講義を受けて、はっと思うことや、なるほどと思うことがあって、とてもおもしろかった。「見えない保育」は、小学校と幼稚園の教育で大きく違う点だなと思った。教師側の願いは子どもに見えないけれど、その願いが育つように関わるのって、すごくおもしろそうだと思った。

・一見ただ遊ばせているだけのように見えても、その環境には教師の意図が含まれているということには本当に驚いた。

・遊びの動機説など、知らない理論などを歴史的な背景もふまえて紹介していただけたので、子どもの自発性とのつながりを考える際にもとても参考になった。

・この授業を受けるまで「遊び」というものがどういうものか知らなかったし、あまり重要なものとして捉えていなかった。しかし、「遊び」を通して、子どもたちがこんなにも多くのことを学び成長していくことを知ることができ、受講してよかった。

・“子どもは遊ぶことが仕事”とよく聞くが、本当に遊びの中には学べる機会が盛りだくさんであることを学べた。その機会を生かせるかどうかは、保育者によるところが多く、環境づくりからきちんとねらいをもっていなければならず、保育の仕事は奥が深いと思った。

【幼児とのかかわり方について】

・幼児の行動は、一見、大人の目から見れば不思議に思えるかもしれないが、その行動一つ一つにはちゃんとした意味があり、新たな発見・想像が生まれている輝かしい瞬間であるのだなと感じた。この子どもの、この行動にはどんな意味があったのかをしっかり考え、理解し、関わっていかなくてはいけないと改めて気づかされた。

・“その場だけの”その子のため、と“長期的に見た”その子のためとでは、異なることに気づいた。

・幼児とかかわる際に、幼児ができるところとそうでないところを見極め、それに基づいて援助したり、アドバイスを与えたりする必要があるということが理解できたのでよかった。

・子ども一人ひとりを理解し、発達特性に応じた教育をすることはとても大切だと思った。

・この授業で一番学んだことは、教師が何事に対しても目的を持たなければいけないということだ。ただ様子を見るだけでは発達を促すことはできず、目的をもって見守るからこそ発達することができるのだと感じた。

【自分の専門教科との関連】

・幼児の発達についての理解が、特別支援教育の対象児への理解にもつながると思い、この講義を受けた。特別支援教育についての話題も提供していただき、大変勉強になった。

・保育と特別支援教育には、相手とどのようにかかわるか見極めること、支援を最少にし、その子自身のできることや可能性を引き出すこと、自立への要素を増やすことなど、似ている点があることに気づいた。

・昨年の特別支援学校の実習で、「あんまり親切なのもよくないよ」と声をかけられた。この講義を受けた今、実習に行っていれば、もっと根気強く、しかも意図をもって見守ることができただろうなと感じる。

【教科書・プリント等について】

・教科書は、分かりやすい言葉でとても読みやすく、多くの事例と照らし合わせて考え、納得できるので、すごく良いなと気に入った。

・教科書がとてもわかりやすかった。幼年教育が専門ではないのですが、すごく読みやすく感じた。また事例が数多く載っていて、とても参考になることが書かれていたので、興味をもって読むことができた。

・毎回配られるプリントは、とても読みやすくて分かりやすく、復習の際にとても役に立った。

・ビデオや、子どもたちの願いに対して教師がどのように声かけなどの対応をしたかなどの実践資料などを紹介していただいたので、幼児の実態等大切なことがわかりやすかった。

【その他】

・先生の体験談やビデオを見て学ぶことが多く、実践的で理解しやすかった。

・先生の授業は、実際の子どものことを例に挙げて話してもらえるので、とても分かりやすいし、楽しい。

・授業を受ければ受けるほど、奥が深くおもしろいと思った。

・この授業が、幼児教育に関して受ける初めての授業だったので、学びになる部分が多く、とても満足のいくものだった。